富士川游と広島

富士川英郎

富士川游は慶応元年（一八六五）五月十一日に広島県沼田郡安村大字長楽寺（現・広島市安古市町）に生まれた。父、雪（すすぐ）は同村の医師で、天保元年（一八三〇）八月一日に生まれ、十五歳のとき広島市に出て、芸藩医西道寿の門に入り、傍ら頼聿庵について、儒学を学んだ。嘉永二年（一八四九）、二十歳のとき、師の西道寿に随って江戸に赴き、一年間、霞ヶ関の芸藩藩邸に寄宿したが、帰国ののち、長崎に遊んで、吉雄氏の門に入り、瘍科を修めた。吉雄氏は吉雄幸載であったろうか。

富士川雪が郷里の安村に帰ったのは安政元年（一八五四）のことで、それ以後四十余年間、彼はそこで医業を行って、一生をすごした。游はその長男として生まれ、明治六年（一八七三）広島市の開成舎に入って、小学教育を受けた。ついで明治十一年（一八七八）浅野学校に入って、中等教育を受け、翌年、広島県立広島中学校に転じた。やがて明治十三年（一八八〇）に京都に遊学したが、翌十四年六月、母タネの急逝に会い、帰郷して、九月、広島県病院附属医学校（のちに広島県広島医学校と改称）に入学した。游は明治二十年（一八八七）七月、この医学校を二十二歳で卒業したが、同窓生に尼子四郎があり、尼子とは生涯にわたって親交を結んだ。

これよりさき、父雪は明治九年に近隣の同志を語らって、奨進医会を創立し、同十二年七月に更にこの会の規模を拡張して、これを私立奨進医会と称した。この会は医術の進歩をはかり、また、医者の風紀を正すことを目的としたものであるが、游も広島医学校に在学中はこの会に出席して、その雑務に当ったことと思われる。

游は明治十五年（一八八二）の春、「黄金世界」という文明批評的な一文を草して、「芸備日報」に投稿したが、それが同紙の社説に掲げられた。また、明治十八年（一八八五）三月に東京の「中外医事新報」に「生卵に対する特異素因」という論文を載せ、それがきっかけとなって、同誌上でさらに二回にわたって、このテーマに関して、論争をしたが、これらのことは游が広島医学校在学中の出来事であった。

明治二十年秋（一八八七）、游は上京した。そして明治生命保険会社の保険医となるとともに、中外医事新報社に入って、雑誌の編集に従った。やがて私立奨進医会を広島から東京へ移して、明治二十二年（一八八九）四月から「私立奨進医会雑誌」を刊行したが、当初、この会の会員はその大半が広島県人であった。

明治二十五年（一八九二）から私立奨進医会は組織を改め拡大して、次第に中央の学会としての性質を帯び、また、毎年、三月四日に医家先哲追薦会を開催して、我国の卓れた医家の顕彰と、医史の研究をその主要な目的の一つとしたが、この私立奨進医会がやがてのちの日本医史学会とつながっていることは周知のところである。

明治二十九年（一八九六）五月、游は呉秀三、尼子四郎、三宅良一とともに、芸備医学会を創立した。これは芸備両国の医家先哲の業績を顕彰し、「医家たるものの人物を養成する」ことをその主な目的とした会であり、会員は広島県出身の医師たちであった。同年五月十日、東京市神田福田亭において創立会が開催され、呉秀三がその会長に就任した。翌三十年（一八九七）一月六日、広島市において芸備医学会発会式が盛大に行われ、三月十四日に東京市上野公園不忍池畔の長酡亭において、芸備医学会第一回総会が開かれた。これによって芸備医学会本部の組織が完成したが、明治三十年十一月十二日に岡山部会、同十一月二十八日に福山部会、十二月一日に広島部会（のちに広島医学会と合併）、十二月十八日に京都部会が創立された。

芸備医学会の事業としては、明治二十九年（一八九六）六月に機関誌「芸備医事」を創刊し、それ以後、昭和十六年（一九四一）に至るまで、毎月刊行し続けたほか、『三宅董庵先生小伝』（明治四十一年、富士川游編）、『東洞全集』（大正七年、

呉秀三・富士川游選集校定)、『芸備医志』(昭和十年、富士川游編)等を出版した。

大正七年(一九一八)、富士川游は広島修養院の顧問となった。広島修養院は大正六年の春、本派本願寺の慈善会財団の経営のもとに設立された広島県代用感化院で、平原唯順がその院長であった。游は大正七年からこの感化院の顧問となり、以後、毎年定期、もしくは臨時に、広島に赴いて、数日間、感化院内に起臥した。そしてこの感化院に収容されている児童について、『異常児童調査』(昭和二年)、『異常児童性格研究』(昭和五年)等の報告書を書いた。

大正十三年(一九二四)十二月、游は花井卓蔵、秋山雅之介、高島平三郎、下田次郎、尼子四郎らと飽薇同好社を創立し、翌年一月から雑誌「飽薇」を刊行した。「飽薇」は游の命名によるもので、安芸国の古字たる「飽国」と、備前、備中、備後の三国を併せた称呼である吉備の古字「黄薇」の二つを組み合せたものである。飽薇同好社は広島県人の社交クラブのようなものであったが、その会員にはさまざまの学者が圧倒的に多く、それが自らこの会と、その機関雑誌の性格を規定した。雑誌「飽薇」は富士川游の責任で編集された。

昭和八年(一九三三)、游は義弟の医師石井正人に勧めて、広島市外五日市町に精神療養所たる「養神館」を建てさせ、それを基として養神協会を設立した。この協会は「精神衛生の促進とその普及とを図る」ことを以て目的として、理事は石井正人、上杉謙吉、富士川游、阿部政三、桐原保見、平原唯順の六人で、別に沢原俊雄、三宅鉱一が顧問であったが、この会の設立及び事業は游の発意と指導のもとになされたのである。

なお、他に富士川游が主宰したり、幹部として尽力したりした学会や会合のうち、日本児童学会と正信協会は、ともにその支部を広島に持っていた。

最後に、富士川游が親交を結んだ広島県人を挙げれば、同じ医者仲間に、尼子四郎、呉秀三、呉建、永井潜、三宅良一、上杉謙吉、市川為次郎、赤沢乾一、小田平義等がある。

呉文聰は游が明治二十年秋、上京したとき以来、同県人の先輩として種々の世話に預った人であり、親友呉秀三と識っ

たのも最初は文聰の紹介によったのであった。

高楠順次郎とはともに正信協会を創立して、その幹部となり、高島平三郎とは日本児童学会の幹部として、ともに永年、この会の発展に尽力した。そのほか、法曹界の花井卓蔵、松井茂、教育家の下田次郎、秋山雅之介、数学史家の三上義夫、哲学者の三枝博音、仏教家の常光浩然等、みな富士川游と親交があった。

（東大名誉教授）